



Potential impacts of future tele-medicine 未来の遠隔医療がもたらす世界

Hiroshi Otake

Master of Science in Clinical Informatics Management, Stanford University, School of Medicine, USA

本邦初の遠隔 ICU システム (eICU) は 2018 年に昭和大学に導入され、ICU における死亡率と感染率の低下をもたらした。以来、厚労省の補助金、COVID パンデミックによる ICU 需要の急増、集中治療学会による重点施策化など、遠隔 ICU 普及に向けた環境が整いつつある。

2000 年より eICU が導入されている遠隔医療の先進国アメリカでは、COVID パンデミックを機に、大きく医療の遠隔化への舵が切られた。現在、診療のオンラインサービスを提供するベンチャー企業に対して巨額な投資が集まっている。例えば、健康保険で大きなシェアを誇るカイザー・パーマネンテは、メイヨークリニックと共同で、各家庭において入院並みの医療を提供する Hospital-at-Home サービスを提供する会社に大きな投資を行った。さらに、2022 年からは 5 種類の新しい Remote Therapeutic Monitoring (RTM : 遠隔診療モニタリング) に関する保険請求コードが認められる。これらの動きに対して警戒心を強めたカリフォルニア看護師協会は看護師による従来のケアが失われつつあるとの危機感を表明した。また、スーパーマーケットのウォルマートやドラッグストアの CVS といった巨大企業が一般の外来診療に参入する流れも起きている。本講演では COVID が扉を開けた新たな遠隔技術や AI を用いた最新の医療の潮流を紹介し、未来の医療の世界を予測する。